

五月に入ってから多量に出る汗に苦しめられた。軽く慰さめるより外はなかった。

「お母さんはさう簡単におっしゃるが、私は一生懸命なんです。」と一生懸命に言音を強めて母を叱った。母はこれを繰返して涙ぐむのである。

「今日は又手と足を洗って呉れないか、汚れたから。」  
婆やは、瘦せ細って汚れた手足を厭ふ気もなく洗ふ。

「をばさん、垢のつく病人は死なないと云ふね、……」  
こんな事も言った。

「お母さん御飯ですか、淋しいから、いやでせうが私の顔の見える所で食べて下さい。」

兄は子供じみてしまった。一寸でも二人の姿が見えなくなると、用意の呼鈴を押した。

### 臨終の灯一つ澄めり遠蛙

最期の三十分前、初めて苦痛を漏して、医者注射を許した。医者来たのを知ってか、水挿の水で口を清めてから、傍の懐中時計をじっと見つめてゐた。時計の蓋を快く音をして閉してから一分の後が、兄の肉体的生命の終りであった。

かう私は永く書きつゞって来たが、兄の生涯は短く又暗く書き続ける程余りに惨ましく且悲しい事ばかりである。この辺で筆をとめて、しばらくは、あの英国のながしの名優の紛したハムレットの姿を描いて、せめてもの生前の兄の姿を思ひ返して、溢れ落つる

悲しき涙を止めやう。

(曲水10—9)

## 空 蟬

南 拾 参 生

「長頸子君が亡くなりました。」

いづれ皆も行く道に待つ君涼し

と浮かびました。」水巴先生よりのお便りであった。

此の頃は、時候のせいでもある故か、だいぶん気弱くなってゐる私である。昨日も鶯谷の青草の上に寝転るんで、赤彦の歌を読み乍ら――

朝顔の花に向ひて不覚なる涙と思へど疲れて流る、

どうしても、朗かな気持ちへ泳ぎ出で得なかつた私である。今この報に接して、未だ見ぬ友への愛着と別離の言ひ知れぬ感慨に閉ざされて、止めどもなく涙が流れる。

私は水巴先生へ、――

「せめて故人を追憶するすべにもと、遺文の全部を誰彼曰くまで読み返しました。実にうまいものです。一章一句苟もおろそかにしてみません。こんな事を言つては失礼ですが、投げ遣りな物は見やうと云つてもありませんでした。快くなられましたら、句に就ても文の上でも教えて載くことが沢山ありましたものを。惜しい事を致しました。後から病まれて先きへ死なれて行くこともなか／＼淋しい